変わる日本の「暮らし」と「まち」 28

まちづくりに住民の願いを

岩手・釜石市鵜住居地区復興事業

（2013年◆平成25年から実施中）

新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

鉄のまち釜石。多くの人が思い浮かべるのは、新日鉄釜石の名ではないだろうか。だが、盛岡藩の大島高任（おおしまたかとう）が釜石で洋式高炉による製鉄に成功したのは1858年のことだ。そのとき、釜石は日本の近代製鉄発祥の地として記録された。この製鉄所が新日鉄釜石へ続き、最盛期には9万人超の人々が釜石に暮らした。

釜石は漁港という別の顔も持つが、住民が大切にしているのは「虎舞（とらまい）」を始めとする地域の祭りだ。盆暮れには帰郷しなくても、祭りには戻る。その行動が住民の思いを代弁する。釜石北部の鵜住居（うのすまい）地区でも住民総出で催される。2012年には、鵜住居の虎舞が釜石市の指定文化財に定められた。

◆話し合いを重ねて復興へ

11年3月11日、東日本大震災による津波は鵜住居地区に大きな被害をもたらした。海岸から1・5キロから2キロまで押し寄せた津波で853戸すべてが被災。うち752戸が全壊した。歯科医院を営む佐々木憲一郎氏は、高台に避難しながら海を見た。その視界には、津波に押し流された家が壊れるときに上がる土煙が映った。

「バキバキという音とともに、瓦礫がものすごいスピードで押し寄せてきました。もし逃げるのが10秒遅れていたら津波に飲まれていたでしょうね。30秒遅れていたら死んでいたかもしれません」

高台には約70人の住民がいた。

「このまちはもう絶対に復興できない、避難場所にいた人以外は助からないと思いました」

日が経つにつれ、住民の8割以上が生きていると知った佐々木氏は、これなら復興できると鵜住居に残る決意をした。

鵜住居の新たなまちづくりが始まった。破壊された6メートルの防潮堤を14・5メートルとし、平均1・7メートル嵩上げした宅地より高台に学校を移す。早い地区では来年の冬ごろに整地が完了し、住宅建設に着工できるという。

迅速な復興に寄与するのが「まちづくり協議会」だ。住民と一緒に復興を考えたいとする市長の考えは、住民の声を計画に反映させることで実現する。そこで、市は市内21地区すべてに協議会を設置した。釜石市復興推進本部の金野尚史氏は、その中で最も機能しているのが鵜住居地区だと語る。

「鵜住居の被害が大きかったからかもしれません。すでに住民が話し合う素地もあったので、市の考えと合致したのでしょう」

鵜住居では、震災直後から住民が新たなまちづくりを話し合う場があった。学校を中心とし、駅前の賑わいを取り戻すことなどを自主的に話し合っていた。それが協議会に発展したのだ。住民と市の二人三脚がうまくいっている理由について、釜石市議も務める古川愛明協議会副会長はこう指摘する。

「市は、構想した復興案をまず協議会幹部に説明します。そこで出た意見を汲み、新たな案を構築します。協議会に諮られる案は住民の意見が反映されているので、見当違いにはならないのです」

案は、さらに多くの住民の声を組み入れて修正される。1年ほどかけてそれを繰り返す間に、何十回となく案は書き換えられた。一見時間がかかるように見える。だが住民の合意が得られた案が採用されるため、住民と市の歩調が揃ってかえって早く決まるのだ。

鵜住居のまちには盛土に使用する土がいたるところに積まれる。

◆住民の願いを設計に反映させる

古川氏は震災後、市内の避難所をくまなく歩いた。被災者の声に耳を傾ける過程で信頼を獲得。住民の安否、住民の考えや要望を熟知していた。古川氏は「協議会には、若い力も必要」と考え、四十代の佐々木氏を巻き込んだ。

佐々木氏の歯科医院は建物が残り、カルテとレントゲン画像も残ったので治療を再開した。

「自分のことだけを考えれば再開で十分です。でも、亡くなった人の無念を思うと、鵜住居をもっといいまちにしたいと思いました」

佐々木氏は協議会の会長代行を引き受ける。信頼を集める古川氏や佐々木氏らが住民の声を拾い、市とまちづくりを進める。そこに関わるのがURだ。市や協議会に不足する区画整理などの専門知識を説明し、住民の元を幾度となく訪れて相談や不満にも応える。

「時間はかかりますが、そのほうが近道なのです。揺れ動く住民の方々の本音も聞けますから」

UR釜石復興支援事務所の藤原広志課長はそう口を揃える。URは住民の生活習慣にも目を向ける。虎舞を愛する鵜住居の住民からは「祭りの場」がほしいと要望された。住民の気持ちを知ろうと、藤原は昨年9月に練り歩く祭りの後ろを歩いた。練り歩きの途中で休憩が入る様子を見て参加者に尋ねる。彼らによると、震災前は決まった場所で休憩していたという。そこは非常に狭く、参加者が道路にはみ出していた。

「新たなまちには公園を作る。それを虎舞と結びつけられないか」

藤原は虎舞などが練り歩く道幅、休憩場所の公園などを設計に反映させるよう提案。計画には3ヵ所の公園の設置が盛り込まれ、虎舞の休憩場所となる。祭りの拠点となる鵜住神社（うのすまいじんじゃ）の参道を広げ、脇に公園も設置する。そこが住民の願った「祭りの場」になる。住民は、祭りに対する思い入れが設計に反映されたことを喜んでいるという。

藤原は阪神・淡路大震災で実家が被災。その体験があるからこそこの仕事に力が入ると話す。

「住民の方々の要望をすべて聞けたわけではありません。でも、あとは前に進むしかないのです」

鵜住居のまちづくりで最も早く完成するのは、まちを見下ろす高台に建設される学校だ。佐々木氏は期待を込めて語る。

「子どもたちには、復興するまちの様子を見てもらいながら育ってほしいですね。そうすれば郷土愛が芽生えてくれるのではないかと思っています。もう一度自分たちもがんばるんだ。そんな思いを持ってくれればいいですね」

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社